

# 回会報

154号

新日本美術協会

事務局  
横浜市港南区港南台  
1-39-5  
鈴木忠義方  
TEL045-832-0504

編集委員  
小高峯夫  
富岡ネム  
大石亨  
四方公子  
早田美智子

原稿常時募集  
次号平成28年8月予定

## 「巻頭」にかえて 早田美智子

震災から五年目の三月十一日、私は東松山の丸木美術館にいました。「原爆の図」はもちろん圧巻ですが、この日の目的はその一角で開かれていた「牧場・山内若菜展」を見ることでした。

作者はまた三十代の若い女性です。福島「希望の牧場」と「細川牧場」を取材し描いたといえます。

原発から十四キロの地点にある「希望の牧場」には、被爆し商品価値がゼロになった牛が今も三〇〇頭、殺処分を拒否した牧場主によって生かされています。

一昨年の初秋、私もここを訪れる機会を得ました。広い牧場の一面に黒い牛たちが散らばり、大きな乾草のロールを食っていて、事故が嘘のようでした。

「命あるうちは生かす」と言った牧場主を、若菜さんは「神々しい光を放つこの人を描きたい」と思ったそうです。作品は、縦2.5メートル幅1.6メートルの大作です。黒と少しの茶と白。一見真っ黒な抽象画のようですが、目が慣れてくるにつれ、シルエツトのように儂げな黒い牛の群れが見えてきました。震えるような線が印象的です。かすかな光は「希望」の象徴のように見えました。

現実の牧場は青い空と緑の大地、牛たちは円らな瞳でこちらを見ていたに違いありません。しかし、現地に立った時の私の実感も、この絵に近かったと思います。

パンフレットの中に、美術評論家で新日本美展の審査委員でもある中野中先生の言葉が載っていました。

「一足で歩いて現場に立ち、よく見て感じて、考える。自分の存在の意味を、絵を描くことの本来を。『今、戦争の時代に生き、3.11の人災の直後に生き、それを肌で感じずに絵が描けるでしょうか』と自問し、発する。奇妙に頭に残る作品群だった。(一部抜粋)」

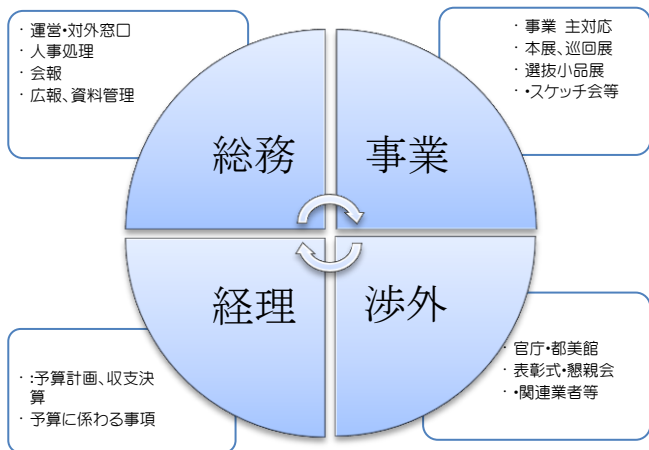
二時四六分、絵の前で黙祷。貴重な一日でした。

## 本部組織の編成について

事務局長 鈴木忠義

会長のご逝去を受け、昨年六月の総会で、新日美は会長制を止め、代表制で運営することが決議され、これに伴い新会則が制定された。

この三月の委員会、総務、事業、渉外、経理の本部組織の四部門に委員会に出席している各委員の所属割り振りが決定了承された。



総務、事業、渉外、経理部の業務は密接に関係しており、相互連携が欠かせない

これにより、いよいよ具体的に本部組織が編成、動き出す運びとなった。ここで簡単な四部門の業務内容の説明を行い、会員皆様のご理解の一助にして戴ければ幸いです。

**総務は**、運営計画の立案、実施、記録・官庁、業者に対する申請、報告、調整・人事管理、名簿、タック等・会報の企画、原稿、印刷、配布・広報・ホームページ、広告企画、印刷物手配、配布である。

**事業は**、本展関係業務、役割分担、会場管理、審査準備、記録、通知・巡回展・作品管理、選抜者調整他・選抜小品展・選抜者連絡調整、会場設定等開催準備である。

**渉外は**、官庁、業者に係わる連絡を総務と協力実施、官庁賞、企業賞等準備、申請受領、賞品、賞状準備、表彰式、懇親会関係である。

**経理は**、予算計画、収支決算・会費徴収、支払業務・業務関連経費に関する処理・画集、ポストカード、巡回展、小品展他

経費に関する処理・画集、ポストカード、巡回展、小品展他である。以上が本部組織の四部門の概略である。

## 委員コラム

四人の画家たち 永野信

私が幼小の昭和十三年ころですが、さくらの花の小枝を描き、初めての水彩絵の具で白に赤色を少し混ぜた時のさくら色の美しさは、今でも覚えていますが。この時の驚きがのちに私が絵を好きになった現在に繋がっているのではないかと思います。

しかし私が油彩画を始めたのは現役を退職した六十三歳からで、務めていた東京、恵比寿のビル工場内に飾ってあった浮田克躬(1930~1986)の「丘の上の工場」(5100)が動機となっています。ランドマークにもなっていたこのビル工場と四本の兜煙突を描いたもので浮田が二十八歳、昭和三十三年の第一回日展特選作品でした。会社がこの絵を買ったのはモチーフと浮田の養父がこの工場内の研究所所長をしていたからでしょう。

その後さらに衝撃を受けたのは平成十三年に目黒美術館で開催された荻須高徳(1901~1986)の生誕100年記念展でした。戦前戦後のパリを主にヨーロッパの市街地を力強く描いた5100号の作品で、その色調と厚塗りの筆跡は忘れられません。そしてその時の画集に荻須が大正十五年、二十五歳の美術学校生の時にこの四本の兜煙突を描いているではありませんか。

今日恵比寿のビル工場は複合都市の「ガーデンプレイス」となっていますが、昭和四十七年に私はこの兜煙突のある職場の課長を命ぜられ、当年の作業終了をもって職場の閉鎖が決まり、従業員たちの配転をすることになりました。のちにこの跡地は一時的なビアホールやビール列車となり、さらに工場全体の大規模開発が展開されました。私も職場閉鎖を進めながら多くの写真を撮り、スケッチをしました。浮田や荻須の画風が頭から離れませんでした。

今私はシニア世代後半を絵画とガーデニングライフで忙しくしていますが最近では小堀四郎(1902~1988)、西村計雄(1909~2000)両画伯の元アトリエ、現在は御子孫がお住いの自宅に伺う機会がありました。多くの作品を見せて頂き、画伯たちの制作の様子を伺いましたが画家たちの揺るぎない制作意欲と独創性には驚嘆するばかりです。